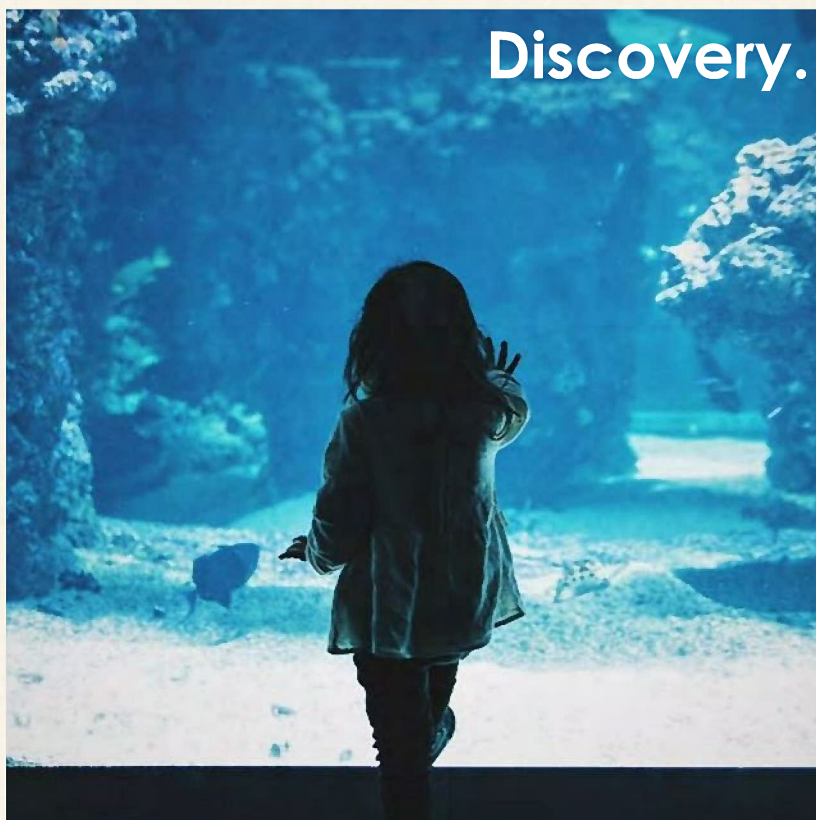


みつけた！

福岡県保育協会通信



By mutual confidence and mutual aid,
Great deeds are done, and great discoveries made;
相互信頼と相互扶助にて、偉大なる行為はなされ、偉大なる発見がなされる。
ーギリシアの詩人 ホメロス

第 63 回全国保育研究大会	2
第 53 回全国保育士会研究大会	3
第 39 回全国私立保育園連盟青年会議 横浜大会	4
保育所（園）長研修会・保育者の集い	5
京築ブロック保育研究大会	6
第 45 回保育総合研修会	7
公立発信 公立保育所（園）職員研修会	8
コラム	9
新園紹介・編集後記	10

第 63 回 全国保育研究大会（広島大会）報告

第二赤間保育園 岩下 桃佳

すべての人が子どもと 子育てに関わりをもつ 社会の実現を目指して

令和元年 11 月 13 日～ 15 日の 3 日間にわたり、広島において第 63 回全国保育研究大会が「すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現を目指して」を主題に開催されました。全国からたくさんの保育関係者が集い、会場はあっという間に埋め尽くされました。

大会 1 日目は、式典や児童憲章朗読、全国保育協議会表彰、行政説明、基調報告、そして参加者交流会が行われました。

大会 2 日目の分科会では子どもの育ちを保障する、子育てライフを支援するなどといった 5 つのカテゴリーの下 11 のテーマの分科会が設けられました。どれも魅力的でしたがその中でも私は、第 1 分科会「新たな時代の保育実践～すべての子どもに向けて～」に参加しました。分科会の中では、規模や立地の異なる 3 園の実践発表が行われ、多文化共生に向けての取組や子どもたちが継続的に意欲を持って遊ぶための取組などの発表がありました。「新たな時代」という文字があるように、時代が移り変わっていくということは、育ちの環境や社会の背景も変わっていきます。その中で、子どもたち一人ひとりが主体的に取り組めるような保育を行っていく必要があると思いました。また、実践発表の後には各園の先生方との意見交換の時間が設けられました。普段こういった機会はないので、非常に貴重な時間となりました。

大会 3 日目は、京都大学の名誉教授である鯨岡峻氏をお迎えして「どのように保育すれば、子どもの心も保育者の心も育つのか」と題し、記念講演が行われました。

講演を聞く中で、改めて「主体」について考えさせられました。保育所保育指針・幼稚園教育要領にもよく使われている「主体」という言葉を、意味を深く考えてこなかったように思います。主体は自分中心の「私は私」の心と、周囲他者との関係を視野に入れた「私は私たち」の心の二面の心からなっています。そして、心は「正の心の動き」と「負の心の動き」の二重になっていますので、主体は二面二重の心をもつということになります。では、主体性とはどういう意味があるのでしょうか。主体性はよく「その人らしさ」と言い換えられることがあります。「その人らしさ」が表れていると周りが評価するときに主体性という概念が用いられます。



今回、初めて全国保育研究大会に参加し、全国から集った保育者たちと意見交換したり貴重な講演を聞いたり、とても有意義な研修となりました。今回の研修で学んだことをさらに自分の中で解釈しながら現場での保育につなげることが出来るようにしていきたいです。この研修会に参加できたことを心より感謝します。



第 53 回 全国保育士会研究大会報告

真光院保育園 馬場 清美

「子ども主体の保育」の 理解促進と質の向上をめざして ～認めあい(愛)分かちあい(愛)ご縁をつなげて～

令和元年 10 月 24 日～ 25 日の 2 日間にわたり、島根県松江市「くにびきメッセ」にて、第 53 回全国保育士会研究大会が「子ども主体の保育の理解促進と質の向上をめざして」を大会主題に開催されました。大会 1 日目は安来節とどじょう堀い踊りのオープニングアトラクションに続き、開会式・式典、基調報告、行政説明、育児漫画家でイラストレーターの高野優氏による記念講演が行われ、2 日目は 8 つのテーマに分かれて分科会が行われました。

大会 2 日目の分科会では、私は「専門性の向上をはかる～専門職としての責務」をテーマとした第 8 分科会に参加しました。分科会では午前と午後に分かれて 2 つの研究事例発表が行われ、それぞれの発表後には 4 名単位でのグループワークによる意見交換、助言者の文京学院大学 梶島香代教授からは考察と助言があり、また、質疑応答も行われました。

最初の研究発表は「遊びを通して子どもを育む保育者の役割～環境構成に着目して」というテーマで、保育者主導の一斉保育の中での遊びの環境や子どもの育ちの振り返りと、子ども主体の保育への取組について行われました。「今日は〇〇をしましょう」から始まり、時間になるとすべて綺麗に片付けて遊ぶ前の状態に戻すことや、遊びのやり取りの中で見守るべき場面で危険を心配して積極的に保育者が介入してしまうことなど、自分の保育でも共通するところがあり、それらが子どもの興味関心を引き出す環境ではなく、保育者主体の環境であることを改めて認識することができました。

また、職員会議の一部で行う「遊び会議」や、遊びを援助するための評価スケール（いかに保育者に遊びの必要性を持ってもらうかをトップダウンではなく、自分達で判断していく取組）は、私の園でも活用できるものと感じ、是非取り入れてみたいと思いました。

梶島先生からは、幼児期において脳教育を発達させる環境を充実させることや、子ども達に高い質の E C E C（人生初期の教育とケア）の機会を提供することは極めて重要で、その中には人的環境も多く含まれており、保育者と子どもの良好な関係を築くには暖かく応答的に対応し、「教える」のではなく「支える」のが効果的である、というお話がありました。また、子ども達は遊びがうまくいかない時のフラストレーションへの対応を行う中から、将来に向かっての予測する力や自分自身を律する力が育まれるなど、遊びの中には「非認知能力」が育まれる内容がたくさんあり、その例として『子どもが成長し



てスマホを使う年齢になった時、スマホという魅力的なツールを湯水のごとく使い続けるのではなく、必要な時だけ使う』という判断力や自己を律する力につながるというお話もあり、幼児期の遊びの中で「非認知能力」を育てていく重要性を理解しました。

その後のグループワークでは、発表園と同じように一斉保育から子ども主体の保育への取組を現在行っている保育者の苦勞や、取り組みたいが園全体の賛同を得られない悩みなどについて、短い時間でしたが意見交換を行い、とても興味深い時間を過ごしました。それに続く質疑応答では、子ども主体の保育への取組を行うことに伴い、様々な行事を無くしたということに関する保護者の反応について質問があり、これについては説明を繰り返しているがなかなか全ての保護者の理解を得るのが難しく、今後も根気強く説明を繰り返していくという回答でした。

午後からは「園内研修におけるミドルリーダー保育士の役割」というテーマで、知識があり冷静だが慎重で臨機応変に対応することが苦手な保育士 A と、明るく人望があり適切なアドバイスができるが知識の積み重ねが不十分な保育士 B が、リーダー保育士の下、ミドルリーダーとしての役割を自覚し、力を発揮できるようになるまでの取組について発表を行いました。

この発表では、子どもを育てるのも同僚を育てるのも、「人を育てる」という括りで共通することが多々あることを踏まえ、通常の保育や研修会の中で、小さな改革や頑張りに気付いた時は声をかけたり、「弱み」と感じていることを克服した場合は、それを見逃さずに共感したり、良かった部分を具体的に示して賞賛したりすることで、自己肯定感を育みリーダーシップを発揮できるようになったことや、保育者が個人の年間目標達成を図るための研修計画を作成し、この計画を可視化したことで目標が明確になり、このことを意識して取り組むことができたことが述べられました。

そして梶島先生からは、リーダーもミドルリーダーを育てることで、自らも振り返りをしながら学び合う関係となり、次世代の人材の育ちに繋がっていくというお話などがありました。

今回の 2 つの研究発表で学び、思ったことは、園内研修や勉強会で提案したことを取り組みながら、同僚とともに保育者としての専門性を高めるとともに、子ども達の心身の健やかな成長のため、保育の質の向上に努めていきたいということでした。

第 39 回 公益社団法人全国私立保育園連盟 青年会議（横浜大会） 報告

おんがの保育園 副園長 星岡 剛

HAPPY ～それぞれの幸せのために～

令和元年 11 月 7 日～8 日の 2 日間にわたり、横浜市にて第 39 回公益社団法人全国私立保育園連盟青年会議が開催されました。未来ある子どもたちの幸せな社会への実現に向けて、参加者の全てが幸せで楽しく有意義な時間を過ごせる学びの場を目指すという想いから、大会テーマは「HAPPY ～それぞれの幸せのために～」となっていました。

大会 1 日目は、開会式と混声アカペラグループ「TRY-TONE」によるオープニングライブが行われ、その後第 1～第 6 分科会に分かれての研修となりました。海上保安庁への視察といった横浜という土地ならではの分科会をはじめ、オープニングライブを行った「TRY-TONE」と一緒にアカペラを体験する分科会等、特色ある分科会が開催されました。

私は第 1 分科会に参加しました。「子育てがはぐくむ絆と信頼関係」というタイトルで、音楽家・作家であり元埼玉県教育委員長の松井和氏による講義が行われました。

松井氏によると、保護者が持つニーズへの柔軟な対応を重要事項として捉えたエンゼルプランを起点として、その後の少子化対策や子ども・子育て新制度によって、「子育て」が以前にも増して保育園をはじめとする保育現場に押し付けられ、結果として保護者の子育てへの責任感が薄れてしまったのではないかとことでした。また、3 歳未満児の今後一層の預かり拡大は、乳児を保育園や認定こども園に長時間預けることに全く躊躇しない保護者を増やす危険性があり、子育てへの責任感の希薄化に拍車をかける恐れがあるとも言われていました。加えて、保育士不足や財源等、保育現場の整備が追いついていない現状や、8 時間勤務が標準的な労働時間とされる社会において、こども達は 11 時間保育が標準とされている制度に疑問を感じており、保育は「成長産業」であるとした閣議決定が、日本の家庭崩壊を進めるのではないかと大きな不安を持っているとのお話でした。だからこそ、保育界全体で「こどもの最善の利益を優先する」ことを重要課題として、現在の流れを変えてほしいという想いを講義の間、何度も説明されていました。

こどもの利益と保護者のニーズ、相反する部分がある中でそのどちらにも可能な限り対応し、職員の労働環境の十分な整備が施設運営に今後一層求められると感じ、誰の為



の保育なのかを今一度振り返る必要性を強く感じました。

大会 2 日目は、公益社団法人全国私立保育園連盟 常務理事の塚本秀一氏より、子ども・子育て会議や幼児教育・保育の無償化に関する情報、公定価格の適正化を主軸とした情勢報告が行われました。

その後、「夢の実現 ツキの 10 カ条」というテーマで、玩具コレクターとして世界的に有名な北原照久氏による記念講演が行われました。北原氏は、高校で出会った恩師からかけてもらった「やればできる」という言葉で、褒めてもらえる嬉しさを知り、この一言が自身のターニングポイントとなり、そこから人生が劇的に変化したそうです。その後、様々な夢を次第に実現する中で、夢の実現の為に北原氏が信条とする「プラス思考である事」、「知識を増やす事」、「素直である事」、「様々な事に関心を持つ事」、「感動する事」、「感謝する事」、「笑顔を絶やさない事」、「親孝行をする事」、「褒める事」、「良い言葉で終わらせる事」という 10 カ条の説明がありました。

多くの夢を持ち、その夢の大半を実現してきた北原氏の言葉には説得力がありました。同時に、北原氏の人生を変えた恩師からの言葉の様に、1 つの短い言葉でも相手にもたらす影響の大きさを痛感しました。私たちが何気なくこども達に発した言葉であっても、それを受け取ったこどもにとっては生涯の宝とも言える言葉となる可能性もあり、その逆もまたあり得ます。成長することも達と深く関わる私達の職業においては、こども 1 人 1 人への丁寧な言葉掛けの必要性を再認識しました。

終わりに、今大会への参加を通して、自らの保育に対する考え方を振り返る良い機会を与えていただきました。大会実行委員会の先生方をはじめ、大会開催にご尽力いただきました全ての方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

令和元年度福岡県 保育所（園）長研修会・保育者の集い

青葉はるまち保育園 園長 飯田 大輔

令和元年度福岡県保育所（園）長研修会・保育者の集いが福岡市・西鉄グランドホテルに於いて 11 月 28 日、29 日の二日間にわたり開催されました。

「保育の質の向上」と「保育量の拡大」を目標とした「子ども・子育て支援新制度」が平成 27 年 4 月からスタートして 5 年目を迎え、今年度が見直しの年度となっています。この間、待機児童の解消を図るため、保育所の新設・増設、事業所内保育施設や企業主導型保育施設の整備など量の拡大は進んでいますが、保育士の確保が厳しい状況から、「当面の措置」として職員の配置基準が緩和されるなど、保育の質の低下が懸念されています。保育所は児童福祉施設としての意義や役割を果たす一方で、乳幼児福祉と社会経済活動を支える役割を担う公共的施設であることから、少子化対策や労働力の確保対策等の役割を求められるようになりました。現在、保育現場では保育士確保対策や職員処遇のあり方等が喫緊の課題となっていますが、こうした中でも保育所の持つ本来の使命や役割を守っていく取り組みが必要となっています。

このような背景をもとに、今年度は研修一日目の講師として神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授の北野幸子先生をお招きし『「保育の質の維持・向上を考える」～自己評価を活かし、個から組織の発展へ～』と題してご講演をいただきました。講演では、今の保育制度において、その都度変化する社会の中で「保育の質の向上」だけでは無理があり、大切なのはできることから始める「保育の質の維持」が大切になっていきます。それが将来的に各保育所の保育の質の確保に繋がっていくことを仰っていました。そして、その為の取り組みとして「保育の可視化と発信」を丁寧に実行することが必要になります。昔から行われている子どもの遊びの中での育ちや学びを丁寧にしかかわるプロジェクト型保育を筆頭に、すでに行われている保育そのものをドキュメンテーションすることが重要になっていくそうです。保育士が継続して子どもに対する理解を深め、私たちが自信と誇りをもって保育を発信できるようにしていくことが、保育所保育の改善や充実が図られる第一歩になっていくとお話になられていました。

その後の「保育者の集い」では、多くのご来賓の皆様の前で、長年の保育所等でご活躍頂いた功績により、福岡県



内各地区より 57 名の先生方が福岡県保育協会会長特別表彰を受賞されました。心からお喜び申し上げます。さらに情報交換会では、お忙しい中多数の議員の方にご臨席を賜りそれぞれの地域の現状などをお伝えすることができたのではないかと思います。

研修二日目は、社会福祉法人友愛福祉会おおわだ保育園理事長、厚生労働省子ども家庭局保育課保育専門調査官の馬場耕一郎先生を講師に迎え、「管理者として所（園）をどう運営していくか」と題して、講演していただきました。講演では、これからの時代において運営者として社会の価値観の変化に対応していかないといけないこと、保護者や保育者の常識や感覚の「認識のズレ」や「言葉のズレ」を理解することが大切であること、今施設を取り巻く問題を解消することが運営していくうえで大切になっていくことをお話になられました。実際に馬場先生の園では労務管理の見直しの上、職員の有給取得を 100%にしたことや、自園での防災訓練の炊き出しを毎月行うようにしたことなど興味深いお話をしてくださいました。今後も保育専門調査官として書類作成の実態調査や保育士業務のタイムスタディ調査などを通して保育園の保育の質の向上を求めていくとお話になられました。

この二日間の研修では、保育士の業務負担軽減や保育士不足の現状でどのように保育所保育の質を担保するのかを具体的な事例をもとに学ぶことができました。いろいろな事件・事故が起こる中、施設の労務環境の充実や子ども理解に基づく保育の形成、周知が地域の福祉を支える保育所として急務であると感じられる有意義な研修となりました。

第 57 回 京築ブロック保育研究大会報告

第 1 ひまわり保育園 園長 田中 公子

子どもたちも 私たちも こちよい保育 ～ひとりひとりをたいせつに～

令和元年 11 月 10 日（日）、苅田町立中央公民館に福岡県保育協会・京築地区の保育関係者約 450 名が集い、第 57 回京築ブロック保育研究大会が開催されました。

社会の変容とともに子育てで生活環境や子どもの育ちも多様化している現代において、10 月から施行された「幼児教育・保育の無償化」は、子どもの保育環境にとって大きな影響を及ぼすものと考えられます。私たちは、これまでの保育実践により一層磨きをかけ、社会変化にしっかりと向かい合い対応して行くことが求められます。今回のテーマに基づき、子どもも保育者も笑顔で毎日の生活が営まれる保育現場を目指すことを目的とした、意義のある大会となりました。

式典では、京築地方保育協会保育士会会長の森住先生の児童憲章の朗読、大会会長の岡村先生の式辞に続いて、福岡県保育協会会長の万田康先生のご挨拶、さらに大会名誉会長で苅田町長の遠田孝一様から苅田町での大会開催のお礼と町の子育ての取組等の紹介がありました。大変御多忙の中、衆議院議員の武田良太様の代理秘書である山中海平様、参議院議員の松山政司様、福岡県知事の代理として福祉労働部次長の塩川正一様をはじめ、県議会議員、町議会議員の方々にご祝辞を賜りました。一般表彰としては、14 名の先生方が、福岡県保育協会会長の万田先生より、これまでの功績を讃えられ、表彰を受けられました。今後も益々のご活躍を期待しております。

記念講演は、学校法人菊池学園理事長の菊池政隆先生を講師に迎え「ひとりひとりと向き合う保育～明日からの保育を子どもと共に楽しむために～」という演題でした。菊池先生は、複数の保育園にて保育士を 9 年経験の後、社会福祉法人の理事をされながら、数多くの保育園等を開設されました。園長としても 10 年勤めて退任され、学校法人の理事長に就任されました。保育養成学校の客員准教授を兼任されながら、研修会講師としても全国でご講演されています。さらに、親子コンサート・テレビでも歌のお兄さんとして「まかせんせい」の愛称で親しまれ大活躍中です。

先生の豊富なお経験から、一日の出来事に沿って身近な事例をあげて、わかり易くお話しくださいました。視診・遊び・一斉保育・散歩・食事等それぞれの場面で保育は、オーダーメイドでなければいけないことや、一人ひとりに合わせた保育をし、目の前の子どもに応じて保育を変えていく柔軟性を持つことの重要なポイントを学ぶことができまし



た。視診については、子どもと向き合うチャンスであり、子どもの命を守り、心の中も受け止めてあげられる大切な時間なので、確実に行わなければならない。その方法として、必ず全員の子どもと握手をして目を合わせ、ひと言ことばをかける。熱いと思ったら、1.5 倍目をかける、元気がないと思ったら 1.5 倍声をかける。当たり前のことです、心に響く言葉でした。玩具の片づけをしない子には、先に片付け方を知らせるのではなく、まず、一緒に遊んで「楽しかったこと」を伝えていくこと。そのうえで、保育士が片付ける姿を見せ、子どもとともにに行い共感することで心も通じ合っていくものである、など。いろいろな事例から、どのように先生が関わってこられたか、自分ならどうしたかなど、振り返りながら考えることができました。どれもが子どもの主体性を大切にする保育、子ども自身の意欲を育てる保育、一人ひとりの気持ちを受け止める保育につながっていることを改めて感じました。

特に一斉保育の事例では、絵を描きたくない子どもはどうするかについてでしたが、1 日で全員描くのではなく、描きたくないという気持ちも大切に、「3 日間で絵を描こうね」などと約束することで、子どもに自己選択をどんどん経験させてほしい。大人の都合のための一斉保育になってはいけない。保育士は常に、「今」疑問を持ち、保育を見直しながら、ありきたりの保育ではなく、今の子どもたちに合わせた保育、そのために一番良い方法を考える保育を心がけてほしいというお言葉を、しっかり受け止めて実践していきたいと思いました。

最後に、これからも保育士が、子どもたちとともに笑顔で楽しみ、心の中に楽しい思い出をいっぱい詰め込んであげ、どんなことがあっても、自分の力で乗り越えていくことができる子どもにしてあげてくださいというメッセージをいただきました。現場ですぐに活かせる手あそび歌や、温かいお言葉に、会場全体が笑顔であふれ、感動した素晴らしい研修会でした。

当日は、天気にも恵まれましたが、会場が大掛かりな外壁工事のため、ご不便をおかけしました。京築地方保育協会会員並びに保育関係者の皆様方のご協力により、本大会が無事に開催できましたことに心より感謝するとともに、お礼を申し上げます。実行委員の先生方におかれましては、計画、準備から大会終了までご尽力をいただきまして、誠にありがとうございました。

第 45 回 保育総合研修会報告

飯塚保育園 園長 須亮 釈恵

乳幼児期の保育・教育の 質とは何か

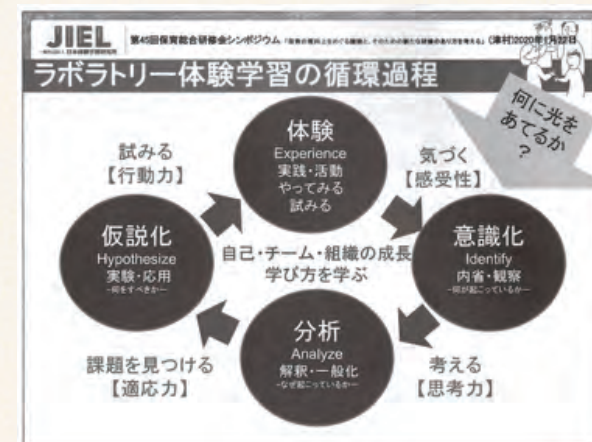
～子どもの権利・SDGs（持続可能な開発目標）の視点で
考える保育・教育の質とその向上のための
新たなアプローチを探る～

2020 年 1 月 22 日（水）～24 日（金）の 3 日間にわたり、神戸市において第 45 回保育総合研修会『乳幼児期の保育・教育の質とは何か』が開催されました。

大会 1 日目は、全国私立保育園連盟の塚本秀一常務理事による情勢報告がありました。子ども子育て会議、保育の無償化、これからの保育三団体の取組について説明があり、続いて、厚生労働省子ども家庭局保育課の前川遼氏による保育行政の動向と課題、待機児童、保育士の人材確保育成についてと、令和 2 年度の予算について説明がありました。

1 日目の最後は、那須信樹氏（中村学園大学教授）がコーディネーターとなり、保育業界では知らない人がいない大豆生田啓友氏（玉川大学教授）、北野幸子氏（神戸大学大学院准教授）、津村俊亮氏（南山大学名誉教授）によるシンポジウムが行われ、続いて那須先生の保育の質の向上と研修のあり方についての講義がありました。

シンポジウムの中で日本体験学習研究所代表理事を務める津村氏は、「ラボラトリー方式の体験学習」に取り組んでこられたことの話がされました。ラボラトリー方式とは、①体験から始まり ②次に①で起こったことを学習のねらいに絞って取り上げ ③②で出した事柄の理由や背景を探り考察 ④③から分かったことで次の経験場面で試みることを取り上げ、行動計画を作るトレーニング方法です。このトレーニングでは自らが主体的にかかわりの特徴を探り、よりよいかわり方を探り、自分と他者を共に成長していくところに特徴があると説明されました。



大会初日は講演の内容が深く、あっという間に時間が過ぎていきました。

2 日目は、園内研修について学びたかった私は、こども教育宝仙大学の富山大士氏による第 1 分科会「園内コーディネーターの育成を目指して」を選択しました。1 日目のシンポジウムを受け、より具体的な園内研修の取り組みのあり方、そして「園内研修をデザイン」するコーディネーター的役割を担う人材の必要性和育成について、実際にグループ討議の中で体験し、研修に対する「新たなアプローチ」について学ぶことができました。

最終日は、大阪大谷大学教授で、国際子どもの権利センター理事の岡島克樹氏による子どもの権利と SDGs（持続可能な開発目標）の視点で考える乳幼児の保育、教育について講演がありました。

今大会は、子どもの権利条約の国連採択 30 周年、日本が批准して 25 周年の節目を迎える年での開催。昨年度改定された保育所保育指針において「子どもの権利条約」がより意識され、一人ひとりへの応答的な保育、主体的・対話的な活動の重視等、今までより「子どもの最善の利益」を目指した内容で、未来を担うすべての子どもたちに保障されるべき、これからの保育、教育とは何か、課題や実践について学びの深い研修大会でした。



公立保育所（園）職員研修会

上毛町立大平保育所 所長 末永 浩一

公立部会の事業として、令和元年 10 月 31 日に福岡県吉塚合同庁舎で「公立保育所（園）職員研修会」を開催しました。午前中に基調報告とグループ討議、午後は國學院大學人間開発学部子ども支援学科で教鞭をとられている、神長美津子教授に講演をいただきました。

基調報告では8月23日・24日の両日、千葉県の東京ベイ幕張ホールで開催された「公立保育所トップセミナー」に参加した有吉副会長が、少子化の進行と人口減社会の到来という社会情勢等の変化を踏まえた、保育の現状と取り組みについての説明や公立保育所・公立認定こども園等アクションプラン（四次）の内容などについて報告しました。

グループ討議は公立保育所（園）で働く職員の情報交換を主な目的として実施しました。減少傾向にある公立保育所の現状や役割の他、園の取り組みや保育の課題などについても活発な意見交換が行われました。

午後の神長先生の講演は、『日々の保育記録から「要録」の作成へ』というテーマで行われました。講演の冒頭に聞いた「親の欲目が子どもを育てる」という先生からのひと言。これは親が自分の子どもに育てて欲しい将来の姿を重ねて子育てをしていると、親が望んでいた姿に成長するということだそうです。日々、親が子どもにどのような眼差しを送って子育てしているのかが重要になってくるそうです。その成長の姿が“その子らしさ”に繋がるということです。

「要録」については、次の指導者へ送るメッセージとなるので、分かり易く伝えることが重要だということです。そのためには保育者が子どもを理解しなければなりません。子どもを理解するということは、その子の内面を感じ取ることであり、触れ合いを通して理解を深めることが必要であるということです。心に残るエピソード、子ども同士の関わりや保育者との関わり、活動の様子や変化など、その時の子どもの思いや姿を保育記録として記録していく。特にエピソードについては出来事をありのままに記述し、出来事の中で自分が感じたことや思いを書きつづり、次の読み手に分かるようにまとめることが重要です。記録の視点や方法に一定の形式はないので、自分が記入しやすい方法や様式を見つけて、記録を残す習慣を身に付けることが必要です。保育記録は保育過程の記録に留まらず、子ども一人ひとりの理解の記録でなければならないということです。

そして、保育記録の振り返りを行い、その反省と評価を踏まえて次のように活用することで、保育の質の向上につなげることができます。

- ①次の保育を構想する資料とする
- ②保育者としての関わりを学び保育者自身の資質を磨く
- ③記録を通して保育者間で子ども理解や保育を共有する
- ④個々の子どもの1年間の育ちを捉える

- ⑤記録をまとめてカリキュラム・マネジメントを実施する
- ⑥保護者に子どもの育ちを伝えることで信頼性や妥当性を得る

要録作成は日々の保育の延長です。作成の手順は1年間の保育記録を振り返り、年度当初と比較して子どもの成長や変化、良さ、育ちの背景にある保育者との関わりや状況を捉え、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」を活用します。「保育の展開と子どもの育ち」欄の記入に当たっては、その子らしさや発達の課題を乗り越えるための保育者の援助や指導、その結果みられた子どもの育ちを10の姿に焦点を置いて整理してまとめ、5領域に分けて記述すること。さらに小学校で資質や能力を高めていくための留意点を書き加えた上で次の指導者へつなげることが重要です。

以上が講演いただいた要録作成についての概要です。

本講演は要録作成に至るまでの日々の成長を記録する方法やその視点、考え方など保育者にとって非常に実践的な内容でした。そして記録により子どもの成長が可視化してくるということや、1年間にわたって書き綴った記録の延長を要録としてまとめるための方法などを学びました。

また、1年間にわたり書きつづった保育記録を単に要録作成のための記録とせず、内容の振り返りを行い、反省と評価をすることにより、次の指導計画作成や実施、カリキュラム・マネジメントの実施など、園の運営や保育実践の改善などにつなげることで、保育者の資質向上や保育内容の充実、信頼される園運営につなげることができ、より質の高い保育を提供することができるようになることを学ぶことができました。

21 世紀型
スキルなぜ今 ICT 教育・
アクティブ・ラーニングなのか。

りんでん保育園 園長 笠 信純

りんでん保育園では、一昨年より ICT 教育を導入しました。ICT や IT、スマホ、タブレット、ロボット等、今の子どもたちの周りには当たり前のように存在するスマートデバイスは、子どもにとって悪い影響を与えるもので、子どもは外で元気に遊ぶことが良いと考える大人も少なくないと思います。それでも来年から小学校でプログラミングの授業が始まることもあり、ICT はこれから子どもたちにとって欠かせないツールになるでしょう。

このコラムをお借りして「なぜ今 ICT (教育)・アクティブ・ラーニングなのか。」について考えたいと思います。

ICT 教育

ICT とは、Information and Communication Technology の略であり、タブレットや電子黒板などの情報通信技術を保育や授業などに活用した教育のことを ICT 教育といいます。あくまでも ICT は教育現場での道具のひとつであり、主役となるものではありません。私は ICT 教育で使用するタブレット、スマホなどは、「21 世紀のハサミ」だと思います。普通のハサミも使い方を間違えると危険な要素がありますが、子ども達が正しい使い方を覚えれば、世界と繋がり、様々な可能性が広がり、何よりも自己表現が出来る道具になります。

21 世紀を「いきる力」を育む

グローバルな社会を生き抜くために必要な能力として「21 世紀型スキル」が注目されています。当園が導入している ICT 教育のコンセプトである「創造力」「チームワーク力」「ICT 活用力」は、21 世紀スキルの中でも重要な能力です。幼児教育においては、先生は答えを教えるのではなく、考える方法をアドバイスする役割となります。先生は、子どもたち一人ひとりの個性を尊重し、子どもたちが教え合い、学び合う協同的な学び（協働学習）の場を提供します。そこで子ども達がクリエイティブな活動やチームワーク活動に関心を持ち、正解がなく、ICT ならではの驚きの体験と世界にひとつだけの子どもたちの作品が生まれ、それを先生や仲間にも認められるという感動・成功体験を得られることが何よりも大切です。

今の子どもたちが大人になる 20 年後の世界を見据え、これからの社会では「IT を『道具』として使いこなし、個性を活かす力やチームワーク力など、いつの時代にも求められる普遍的な力を身につけ、新しい価値を生み出

していく」能力が必要になっていきます。

21 世紀型教育カリキュラムは子ども達の“いきる力”を育てます。

アクティブ・ラーニング

2020 年、小学校の学習指導要領が新しくなります。その中にははっきり「アクティブ・ラーニング」のことが書かれています。アクティブ・ラーニングとは、「主体的・対話的で深い学び」と文科省のホームページでは説明されています。

それでは何故これから主体的・対話的な深い学びが必要になっていくのでしょうか。

今、保育園や幼稚園に通っている子どもたちの平均寿命は 100 歳前後になるだろうという統計結果が出ています。定年退職の年齢は平均寿命マイナス 15 歳だそうで、それを考えると 85 歳位まで元気なら働ける社会が子どもたちを待っていることになります。そう考えると大学を出て、60 年以上社会で働き続ける中で、同じ会社でずっと働くより、2、3 回は仕事が変わったり、新しい分野にチャレンジしたりする機会が増えることを国も想定しています。学校だけですべてを教えることには限界があり、社会に出ても学び続ける力を身に付けて欲しいと考えているようです。実際に小学校の 45 分授業のうち 35 分は先生が話して教えているそうです。それを今後は 15 分にして、子どもたちがグループ討論や自ら学びを進められる環境を設定していくことになるそうです。文科省が今回改定する学習指導要領のトップページには、「生きる力 学びの、その先へ」とあり、これはまさにこれからの社会が、どんなに変化して予測困難な時代になっても、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動し（アクティブ・ラーニング）、それぞれに思い描く幸せを実現してほしいという想いが込められているのではないのでしょうか。その実現を手助けし、可能性と世界を広げる道具のひとつとなるのが ICT の活用です。

正解を導く教育、保育だけではなく、自分らしく、自分だけの表現が出来て、それが認められる教育、保育の必要性を改めて感じます。

私の祖父で前園長がよく言っていました「一生学生（がくしょう）たれ」（学びを止めるな、一生学んで生きなさい。）という言葉が改めて思い出されます。

新園紹介

ぴかぴかの新園を宜しく願います！

いろどり 保育園

園長 江嶋 美奈

「社会福祉法人あすか福祉会 いろどり保育園」は、平成31年4月1日から糟屋郡粕屋町仲原に開園いたしました。粕屋町は、国内の町村で、人口増加数日本一になった町です。町内を JR 福北ゆたか線が通り、最も博多駅寄りにある「柚須駅」は、博多駅からわずか2駅という近さ。本園はその柚須駅から徒歩3分と交通の便利なところに建っております。

保育園におきましては、姉妹園が福岡市に2ヶ園、長崎県対馬市に1ヶ園ございまして当園は4ヶ園目の保育園となります。

【保育内容】

課内教室・・・体操教室・和太鼓教室・音楽教室・茶道教室

課外教室・・・体操教室・ＥＣＣ教室・スイミング教室

年間行事・・・進級式・歓迎遠足・観劇会・保育参観・プール開き・星まつり

お泊り保育・交通安全教室・防災教室・運動会・1・2歳児遠足

ハロウィンウォークラリー・芋掘り遠足・七五三宮参り・みかん狩り

クリスマス会・もちつき大会・豆まき（恵方巻づくり）・生活発表会

マラソン大会・ひな祭り会・お別れ会・卒園式

※この他にも、お相撲さんが来園したりとその時々イベント等に参加したり、地域交流も積極的に行っております。また、味噌づくり等のクッキングや栽培を通して「食」の大切さを子どもたちに伝えております。

【保育ポリシー】

0歳児 スズラン・・・純潔

1歳児 ポピー・・・思いやり・いたわり・陽気で優しい

2歳児 バンジー・・・明朗・快活

3歳児 ヒマワリ・・・光輝・情熱

4歳児 ガーベラ・・・常に前進・律儀・我慢強さ

5歳児 パラ・・・希望・夢



各クラスの成長の特性を生かしクラス名をつけました。子ども達が主体的に活動する中で「生きる力」を創れるよう一人ひとりにあった保育のサポートをしていきます。また、沢山の経験、人とのつながりを通して様々な感情をもち、生きる楽しさを知って欲しいと思います。大きな可能性を沢山秘めた子ども達！！色々な色に染まり、その中で自分だけの色をつくり、未来ある人生に「彩り」を添えることが私達の役目であります。

新設園ですが、色々な事に今後もチャレンジし子ども達と共に成長しながら地域に愛される保育園を目指していきたいと思います。

【編集後記】

私が広報部員を担当して2年。その間に多くの出来事がありました。新保育所保育指針の施行、幼児教育・保育の無償化、そして平成から令和へと大きな時代の変化もありました。

さらに、夏にはオリンピック・パラリンピックが開催され、日本は世界中から注目をされることでしょう。しかし、その中で、「子どもたちを取り巻く環境は、どのように変化をしたのだろう」と考えることがよくあります。児童虐待等、子どもたちの笑顔を奪うニュースが目に入って来る今日、子どもたちの一番近くにいる私たちが、いち早くＳＯＳを見つけ、令和が「子どもたちの笑顔が溢れる時代」になることを願うばかりです。

広報部 羽座岡

発行日 令和2年3月15日

発行者 万田 康

編集者 猿渡 保生

発行元 公益社団法人
福岡県保育協会
春日市原町
3丁目1-7

TEL 092-582-7955

FAX 092-582-7956

